

論 説

幕末維新社会思想の座標軸
— 虚構の自由民権 —

田 村 安 興

目 次

はじめに

1. 神話と集合的無意識
2. 脱亜入欧と帝国主義
3. 土佐勤王志士の愛国主義
4. 自由民権の虚構と顛末

小 括

はじめに

戦後の日本にとって愛国主義に関する議論は長い間タブーであった。教育の場からもその言葉は排除されてきた。しかし日本を取り巻く環境は大きく変化しつつある。特に冷戦の終了以降、アジア・アフリカ諸国を中心にして世界の民族主義、ナショナリズムの潮流は顕著になっている。日本では東アジア近隣諸国の愛国主義教育の高揚に対して、愛国心の欠如が指摘されてきた。しかし、国民の大半は戦前の愛国主義教育を体感していない世代であり、彼らとその上の世代にとって日本の愛国主義の歴史観は屈折している。

今日、研究者に至るまで戦前期の反動から、日本の愛国主義成立期の社会思想、すなわち尊王攘夷運動、自由民権運動、皇国史観に関しては教条的理解しかなされず、科学的探求を放棄したかに見える。特に自由民権運動に関しては

肯定的評価がなされ、皇国史観の思想史的评价に関しても同様に、一側面のみが注目され、いずれも科学的評価がなされてこなかった。自由民権運動を含む愛国主義運動は何故アジア排外主義に転化・昇華したのか。その思想史的な決着は未だになされていない。排外主義的愛国主義を理解するためには、幕末維新勤王運動とその背景にある社会思想まで遡らねばならない。そのことは日本の近代社会思想を理解する鍵である。本稿は近代日本の社会思想を学ぶ上で不可欠である幕末維新社会思想の座標軸を示す試みである。

1. 神話と集合的無意識

日本という国はことさらナショナリズムをその国是に掲げなくても、国民の国家への帰属意識は独特なものがある。今日憲法改正論議が行われており、ある政党案では、新憲法の本質について以下の点を強調している。「新憲法が目指すべき国家像とは、国民誰もが自ら誇りにし、国際社会から尊敬される『品格ある国家』である。新憲法では、基本的に国というものはどういうものであるかをしっかり書き、国と国民の関係をはっきりさせるべきである。そうすることによって、国民の中に自然と『愛国心』が芽生えてくるものとする」。また素案には以下の文言があった。「太平洋と日本海の波洗う美しい島々」で始まり、天皇を「国民統合の象徴として戴き」「国を愛する国民の努力で国の独立を守り」「大日本帝国憲法の歴史的意味を深く認識し」¹⁾という明治憲法調の前文が提案された。

憲法にはその時々々の社会思想が反映する。明治憲法（明治22年公布 大日本帝国憲法）には日本の国家は天地開闢以来の天皇を中心とする国体精神が全編に貫かれ、昭和憲法（昭和21年公布 日本国憲法）ではそれが否定された。今回の改正論議では「日本らしさ」「愛国心」が強調されようとしている。この「日本らしさ」「愛国心」は明治以前には存在しなかった。

21世紀に生きる我々にとって、愛すべき日本の愛国心とは何か、あるいは日

¹⁾ 『高知新聞』2005年10月29日

本の愛すべき美德とは何かという問いに対する答えは多様である。人によって違ってもよく、それが個性として尊重されている社会である。過去の日本は違った。今日憲法や教育基本法の論議の中で、明治期に確立し装飾され、利用された「美しい日本像・日本らしさ」を復活させるべきであるという主張がある。彼等の念頭には戦前の日本の社会思想にはあったが今の日本の社会思想にはないものがある。近代日本史の中で「日本らしさの発見」とその普及は国策として推進され、それには神話が巧妙に使われた。

古代の人は情緒を司る右脳が特に発達して世界中に多様な神話を生んだ。その神話は集合的無意識としてその地域の社会思想の深層を形成すると心理学者のユングは言った。社会思想史の中で神の存在は特別な意味がある。その国にとって神の意味がわかればその国の社会思想がわかるといっても過言ではない。

日本人の神について、国学の祖といわれる本居宣長(1730-1801年)は、記紀神話の神々とともに氏神、雷、樹霊、山、海なども、「総じて徳がありかしこきものをカミという」と述べた。日本人は特に自然界の神秘性を好み、天皇信仰と神道も多様な神の一つとして生まれた。

明治以降の日本社会の常識的な「日本らしさ」とは、そして「日本の神の特徴」とは、アニミズム、祖先崇拜の思想が、仏教、儒教と影響しあいながら天皇家につながるかのような国家思想であった。戦前には、国体明徴、国体護持という事が社会教育のスローガンとなった。祖先崇拜の宗教感情は、イエの祭、ムラの祭、クニの祭、靖国神社の英霊につながった。国家宗教としての国家神道は皇室を宗家とする大家族国家であり、皇室の祖先神と天照大神につながった。

柳田国男という人は日本人の伝統的な生活の中から国体につながる糸を発見し、それを民俗学と称した。その学問の意義は家族と万世一系の天皇制につながる「日本らしさ」の発見であった。そのことは日本人の樹霊、山、海、霊魂など総じて自然信仰の中に天皇信仰を位置づけ、国体を神話世界と一体化するものであった。ユング流に言えば集合的無意識の中に現実の国家装置を組み入れた国家であった。ある意味では国民は左脳で考えるべき社会的事象をもっぱら右脳を介して現実社会に対峙した。

しかし日本のカミは日本人の情緒的社会でしか通用しなかった。戦前、日本

らしさとされた、神道、国家神道は民族宗教であったが「大東亜共栄圏」にその宗教を強要しようとした。他国から見れば日本の神道は怪しげな土着宗教である。しかし世界宗教は、人類は神に対して平等の立場で救済される教義を持っており、それが民族、国家を超える普遍性をもった要因であった。日本の国家神道は、他国からみれば到底地域的な広がりをもつはずがない宗教であるにも拘わらず軍国主義の力で普及させようとし、アジア全域で宗教摩擦を起こした。

明治以降の近代日本は狂信的なナショナリズムが国民精神となり、その結果日本は破滅した。明治以降の教育と社会全体による愛国主義は、国際主義や国際協調とは無縁であった。日本の愛国主義教育は日本らしさとは何かという事に求められた。それはある種の宗教となり、別のことばで言えば神国日本を追求することであった。第二次大戦前の日本ではそのことに疑問を差し挟む事さえ犯罪となった。日本の愛国主義・ナショナリズムは対近隣諸国や欧米先進国との摩擦の度に強くなり、軍国主義につながった。日本らしさ、そして愛国主義、排外主義を推進した勢力は、上は政府・文部省であるが、文明開化や自由主義を唱えた民間人、在野の知識人や民権派といわれた勢力がそのイデオロギーを推進した。従って今日、戦前の過度なナショナリズムや軍国主義の責任を一部軍部や戦争犯罪者だけに求めることはできない。むしろ自由平等や啓蒙派といわれた人ほど強烈な愛国主義者、軍国主義者であった。もちろん強制や社会教育による麻醉効果によって神話や愛国心は定着しない。日本に住む人々には明治以前からそのイデオロギーを受容する集合的無意識が十分に浸透していたからに他ならない。

明治憲法には国体を明示し、国家神道を国民統治の理念とする政を司る神官政治に対して国民がひれ伏す政体とすることに成功した。日本の天皇を神官の頂点とする国家づくりの理念は明治国家の設計者以前からの藩政時代からの系譜を持っている。それは国学と称され、幕末尊王攘夷運動の倒幕イデオロギーとなった。この復古イデオロギーは同時に反幕府の側面を持っているために近代開化思想と結合して革命の思想かのような錯覚を国民に与えた。王政復古が革命に映じた事にこの時期の日本の民度を示している。足利尊氏以来徳川幕府まで続いた武士政権は国体に対する逆賊として全面否定し、明治新政権は王政

復古した正当な日本の国体に戻した「革命」であると宣言した。

同じことを歴史は繰り返す。第二次大戦後の昭和憲法は、欽定憲法であった明治憲法を、そして戦前社会を全面否定したアメリカ型民主主義を移植した。それはアメリカが教えた戦後改革であり、民主主義革命とまで一部で言われた。しかし、根底における日本社会は昭和憲法を受入れるほどには熟していなかった。戦後の昭和憲法体制の日本は、国体がかろうじて護持されて存続した天皇制とアメリカ型グローバリズムの妥協の産物であった。

自由主義というイデオロギーがグローバリズムに名を変えたナショナリズムと連携すれば容易に侵略思想と一体化する事は、21世紀のアメリカ合衆国にも見られる。

2. 脱亜入欧と帝国主義

ホッブス、スピノザ、ロック、ルソー、カント、ヘーゲルに至る西洋の啓蒙学者は法治国家のもとではじめて自由が開化するという考え方を普及させたが、反面で非法治国家は有色人種、非文明国、未開の国とみなし、彼等の言論は人種差別のイデオロギーとなった。植民地主義、国家主義は自国内の自由主義と矛盾せず、同一次元のものであった。特にロックやルソー、ミルなど西洋の知識人は強烈な愛国主義者である。このころダーウィンの自然淘汰の原理が社会にも適用され、弱肉強食を宿命と考える発達史観に大きな影響を与えた。彼等にとって未開の非西洋社会は淘汰されるべき社会であり、キリスト教的西洋社会の優位性とその発展法則の解明が人文社会科学と称された。逆に彼等にとっては非西洋社会、イスラム、仏教、道教、アニミズム社会は停滞性と同義であった。

ヘーゲルやマルクスの発達史観は、西洋文明の発展のみから世界史を見ることによってアジア・アフリカなど遅れた地域を宿命的なもの・非文明的なものと考え、人種差別を当然と考えた。そしてその帰結は帝国主義的な領土分割やナチスドイツの全体主義や民族主義、日本の軍国主義、さらにはレーニンによって社会主義と称する政治形態をつくるなど20世紀の世界に大きな影響を及ぼし

た。彼等の思想は世の東西を問わず、文明国が政治制度や民度の劣る非文明国を支配することによって文明化、近代化させる事が善だとする植民地主義・帝国主義の思想につながった。欧米人にとって自らを進んだ文明の種族と認識するようになったのはまず「未開」のアフリカの発見であり、ついでアジアとの出会いであった。西洋人は遅れた未開と出会って初めて自己を文明として認識し、彼らを奴隷や植民地にしたが、その思想的リーダーは日本では進歩的啓蒙主義思想家といわれた人達であった。竹槍しか持っていなかった白人に抵抗したアフリカ人アジア人達は、数十万人、数百万人が銃で撃たれ西洋人に支配されてきた。

18世紀の植物学者カール・リンネは人類の「科学的分類」を行い、アフリカ人は黒い肌、粘着質、サルに似た鼻、膨れ上がった唇、を持ち、その性格は狡猾、怠惰、無頓着と述べた。モンテスキューは、三権分立を唱えたフランス啓蒙主義思想家であるが、黒人は金よりも、ガラスの首飾りを珍重することをもって、文明化されていないとした。また、人間性の本質を形成するものは色であるという考え方は非常に自然であり、アジアの諸民族は、黒人とわれわれとの間にあると述べた。

マルクスの唯物史観や発達史観に大きな影響を与えたヘーゲルは、アフリカは歴史的世界には属さず、したがってそこには運動と発展は見出せないと述べた。また黒人は、発展も文化もなく、奴隷売買は必要であるかのように肯定した。

マルクスやエンゲルスはヘーゲルの歴史哲学を継承し唯物史観として体系化した。彼らはヘーゲルの歴史観の核心が絶対精神の自己運動とすることはキリスト教的抽象論だとしてこれを批判し、経済をめぐる矛盾と統一が歴史発展の原動力であるとした。そして生産力の発展が生産関係と矛盾することで新たな生産様式が生まれるとして社会革命を肯定した。ここで彼等はヨーロッパ世界のみ念頭にしており、アジア・アフリカ地域は歴史の発展から取り残された地域として宿命的な未開の地としていたことはヘーゲルと同様である。彼等はモルガンの古代社会論のモデルをアジア地域に見いだし、それを未開と称した。またアジアの共同体を念頭に置いて、それを原始共産制の次の段階であるアジア

的生産様式と規定して、アジア社会の停滞性を宿命的なものとしなした。

福沢諭吉ら開明派文化人は西洋の啓蒙思想と実学、合理主義を導入した。それは日本人の神話世界に西洋思想を移植させ普及させるものであったが、決して日本人の神話世界には影響を与えなかった。彼等の役割は日本の神話世界を現実世界と結合させ、国民のナショナリズムに合理性を与えた点において近代日本史上大きな役割を果たした。福沢らの思想は文明開化した日本が遅れたアジアを支配することはアジアの発展につながるという侵略思想に合理性を与え、これが広く受け入れられた。

福沢が主張した脱亜入欧とは文面だけみれば文明謳歌の標語に聞こえるが、その裏には当時の西欧列強によるアジア侵略と同じ道を日本が歩むべきであるという軍国主義、帝国主義スローガンの先鞭の役割を果たした。朝鮮半島の多くの歴史博物館では福沢や民権派は日帝軍国主義者の創始者として陳列されているが、戦後の日本では彼らを過剰に評価してきた。福沢や民権諸派が主張した自由主義や文明は裏を返せばアジア侵略と同義であった。今日日本の歴史認識が問われているが、政府指導部だけではなく、啓蒙派、自由主義者といわれてきた彼等の社会思想についての歴史認識が日本には求められている。

西洋の啓蒙思想から学んだ日本の進歩的と称された知識人達の大きな命題は、日本がアジアの中の未開地域から文明国へと転換を図ることであった。そのための思想的動機は万世一系の天皇制と皇国史観の優位性であり、政治的動機はアジア・アフリカ地域唯一の議会開設と法治国家建設であった。このことが民権派や進歩的知識人ほど強烈な愛国主義者であった所以である。

3. 土佐勤王志士の愛国主義

日本人の愛国心のルーツは江戸時代に盛んになった古事記、日本書紀研究を中心とする国学であり、幕末下級武士の国学徒達による、尊王攘夷運動であった。近代日本を推進した人たちは全員例外なく彼等の流れをくむ人たちであった。日本らしさとはなにかを考えるためには国学、尊王攘夷運動の評価が重要である。

日本の国学の中で山崎闇斎は水戸学、土佐の南学の流れをつくった。国学から尊王攘夷論や「国体」思想が生まれた。儒教の忠孝の徳目を教える国体思想は、明治期に「帝国憲法」と「教育勅語」によって近代日本人の精神形成に大きな影響を及ぼした。

日本は国内の統一と近代化策が成功し、わずか数十年で領土をアジアに拡大する先進国になった。19世紀以降、アジアのほとんどの地域は欧米列強の圧力で植民地となったが、日本のみは西欧と同格に領土を拡張する側のアジアの強国となった。その要因は日本の急速な経済発展を可能とした経済的背景があったが当時の国際情勢もこれに寄与した。1850年以降は欧米諸国の戦争や植民地内の反乱が集中し、日本の開国期において極東は列強間の狭間であったという幸運に恵まれた。また、日本の近代化の時期は帝国主義的領土分割の最盛期に対応しており、国内にはそれを推進する保証となるナショナリズムが形成された。そして、幕末維新の土佐派の思想家や政治家がその一翼を担った。

西南雄藩において国学は日本固有の学問として独自に先進的な展開をした。特に薩摩、長州、土佐には、多くの尊王攘夷運動が生まれ幕末維新の原動力となった。南学は土佐学ともいい、京の学者が地方に移動し朱子学を定着させた事がはじまりであると伝えられている。土佐南学を保護した人物は野中兼山であった。兼山が奉行就任後、学者を重用し南学は土佐に根付いた。兼山は、谷時中や山崎闇斎など優秀な人材を教育に重用した。土佐の南学は実学の側面を持つと言われる理由は、兼山の治世に根拠がある。兼山の学問の特徴は、経世済民と儒学、国学が一体であり、自然哲学に及び、自然を補強する公共事業に尽力した。たとえば、山林経営のサイクル方式輪伐制、養蜂・捕鯨等の殖産産業、日本で最初の掘込み式人工港建設、河川の堰と用水路建設による新田開発等である。また糸流し工法などの土木工事は今日の土木学会でも高く評価されているものがある。兼山が失脚後衰退した南学を再興した人物は京で山崎闇斎に師事した谷泰山である。土佐の南学は明確に儒学と決別した国学となった。土佐尊王攘夷派の直接の源は谷家であり、学問の中心は神道であった。彼等学者は藩校や夜学で弟子を教育した。

幕末の土佐下級武士も南学徒であり、彼らは幕末政治に大きな足跡を残した。

幕末下級武士の指導者であった武市瑞山は土佐尊王党を結成した。瑞山の皇国観の熱心さを示す逸話として、瑞山は『^{たほのまほら}靈乃真柱』をどこに行くにも所持していたということが伝説的故事となっている。同書は土居宣長『古事記伝』一節であり日本の建国神話の凶面をわかり易く描いたものである。後世には「瑞山が遊歴の行李中には、一部の『靈乃真柱』を蔵すのみ」²と伝えられた。

土佐では、関ヶ原以降、藩主として赴任した山内家の旧臣と土着の土佐人とは上士と下士の階級制度によって固定化され、このことにより幕末土佐藩の下級武士による尊王攘夷運動が激化した。これが倒幕運動に傾いたもうひとつの要因である。瑞山らが作成した土佐尊王党盟約書にある武市半平太、大石弥太郎、坂本龍馬以下200人近くの土佐勤王党血盟者のうち、郷土、下士が各半数近くあり、村役人、地下浪人、農民などが大部分であり、上士はごく少数である。³ 土佐勤王運動は下級武士中心の運動であった。

瑞山らの勤王運動を思想的に支えた人物は鹿持雅澄^{かもちまさずみ}である。土佐に於ける国学は鹿持雅澄によって大成された。鹿持雅澄は漢学、国学、和歌を宮地仲枝に学んだ。特に万葉集に通じ、大著万葉集古義52巻は、没後20年あまりして明治12年宮内省から刊行された。

土佐藩は幕末において、藩主山内容堂が発用した家老吉田東洋が進めた殖産興業と財政改革が成功した。改革によって藩自ら商業活動と軍備増強をはかり、土佐藩は西南雄藩の一角として幕閣に重要な位置を占めた。

日本の幕末勤王運動の中で時代を超えて今日までとりわけ光彩を放つ土佐の人物は、土佐藩の中に最後までいた人物ではなく脱藩した中岡慎太郎と坂本龍馬であった。両名が幕末日本史の中で重要な役割を果たした事件は、薩長同盟締結に尽力したことである。薩長同盟(盟約)締結は慶応2年(1866年1月22日)とされている。薩長同盟は、薩長の代表が口頭で約束したものであり、正式な条約文書ではないが、この時をもって倒幕の流れが決定的となった。この両名なしには薩長同盟は成立せず、そして薩長同盟が成立しなければ、幕末の動乱が数十年は継続し、ついに日本は中国と同様の運命に陥った可能性がある。従

² 瑞山会『維新土佐勤王史』大正元年11月12.13頁

³ 池田経正「藩政改革と明治維新」『社会経済史学』22巻4号1956年5.6月

来龍馬の裏書以外に彼らの活動の文献による証拠はないとされたが、近年龍馬、慎太郎が大久保の手紙を長州に運んだことを裏づける重要な証拠となる書簡が発見された。

幕末の転換点となった薩長同盟に関して、一介の脱藩の浪人らがどうして大きな役割を果たしたのか。彼らは藩という後ろ盾をもたず、組織から自由であったことが両雄藩の仲介役を果たしえた要因であった。

慎太郎や龍馬などの脱藩の志士は明治以降の政権に参画しようという野心はなかったが、国許の土佐の重役は公武合体派のスタンスによって薩長藩閥に互して新政権を主導できると考えた。明治以降土佐の後藤象二郎や板垣退助らは新政権に参議として中枢を担い、彼らをリーダーとして担ぐ土佐の旧士族は土佐派閥を形成したが、後に自由をスローガンとして反主流派となった。

幕末、龍馬の船中八策が後藤を通じて新政府の五ヶ条の御誓文となったという説があるが、その真偽は定かではない。同書は土佐藩主に対して大政奉還を進言するため洋上で参政の後藤象二郎に提示したものを海援隊士が書きとめ、のちに成文化されたと言われている。憲法制定、上下議会開設、不平等条約の改定、軍事増強、幣制改革などが記されている。龍馬は跋文では「皇運を挽回し、国勢を拡張し、万国と並立するも亦敢て難しとせず」としている。これに対して五ヶ条の御誓文の跋文には天に誓って国是を定めるという大日本帝国憲法と同様の欽定型になっている。船中八策、五ヶ条の御誓文もそれ自体は、王政復古を明らかにしたものである。古代の天皇中心の中央集権的国体に返り、軍備を増強し列強の圧力から自衛するとともに強国となりうる政体への提言書であった。

龍馬や慎太郎が脱藩土佐浪人の代表として今日的評価を受けている存在であるなら、薩摩の「開明派」として一生を貫いた人物は西郷隆盛であった。西郷隆盛が座右の書としたものは儒学者佐藤一斎(1772~1859)の修養書である。⁴

⁴ 『南洲手抄言志録』は西郷が牢居中に佐藤一斎の著作を愛読した備忘録である。佐藤一斎の『言志晩録』の中に次の言葉がある。「少にして学べば、則ち壯にして為すこと有り。壯にして学べば、則ち老いて衰ろえず。老いて学べば、則ち死して朽ちず」「自ら責むること厳なる者は、人を責むるも亦た厳なり。人を恕すること寛なる者は、自ら恕することも亦寛なり。皆一偏たるを免れず。君子は則ち躬自ら厚うして、薄く人を責む」「春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら肅む」

後に、徳富蘇峰は「西郷らの行動は日本国民抵抗の精神として、後世に伝えるべき貴重なものを含んでいる」、内村鑑三は「彼は国家に勝りて正義を愛したり」と述べた。

西郷隆盛は靖国神社には奉られていないが、西南戦争後は反乱軍の指導者としての扱いを受けず、むしろ清貧に自らを処する憂国の英雄として扱われた。民権派を含む征韓論の外治派は同様に政治的に復活し、後に幕末の志士ともども英雄となった。

4. 自由民権の虚構と顛末

土佐が自由民権運動の発祥の地となったことは新政府での抗争と深く関連している。彼等の言動を士族反乱として一部の勢力の運動とみる見方は疑問である。彼等の運動は幅広い大衆に影響を与えた。また同様に彼等のスローガンである自由を「今日的評価」と称して高く評価する人がいるが、彼等の運動を額面どおりみる見方も一面的である。彼等は今日の政治家以上に政治屋、政略家であり、彼等が称した「自由」は政争のスローガンとして利用されたことを念頭に置かなければならない。

土佐は自由民権運動の発祥の地である。土佐自由民権運動の最大の論客植木枝盛は1878(明治11)年次のような民権数え歌をつくり全国を遊説した。

「人の上には人ぞなき 権利にかわりがないからは コノ人じゃもの 二つはない我が命 すてても自由のためならば コノいとやせぬ 民権自由の世の中に まだ目のさめない人がある コノあわれさよ 五つにわかれし五大洲 中にも垂細垂は半開化 コノ悲しさよ」

薩長が明確に倒幕に動いた事に対して、土佐は藩の大勢が公武合体に終始したために、新政府での位置は微妙であった。大久保、伊藤を中心とする薩長の官僚派と西郷、板垣、後藤ら維新元勳の武闘派は征韓論争として表面化した。それでも土佐人は明治10年代末までの新政府中枢において重きをなした。明治2年以降18年までの参議経験者は、薩摩8人、長州6人、土佐5人、肥前4人であり薩長土肥以外は勝海舟1人である。明治新政府の閣僚は、倒幕維新で功

績を挙げた諸藩の野合であり、主流の薩摩、長州に対して、土佐、肥前出身者は野党的立場にあった。

戊辰戦争の武功で新政府の要職を務めた板垣退助は『自由党史』題言において、旧藩主の建言書を引き合いに出して、維新改革の目的が皇権克復と民権挽回であるとの自由党の立党を位置づけた。同建言書では旧藩主の公武合体論と自由党立党の連続性をみることができる。

「維新改革の目的が皇権克復と民権挽回を意義したる…皇室の尊榮益々顕彰するに至るべく、尊皇と民権と一にして終に一致なきを見るなり」⁵。政府は国会開設を公言した直後、議会で対決するはずの政党の伸張を押さえるために政府党を結成し自由党を攻撃した。攻撃の中心は、自由党には尊王論がないというものである。帝政党からの批判を受けた自由党は、板垣の口述という形で、「自由党の尊王論」を発表した。その中で、自由党ほどの忠臣はない。自由党の尊皇は、彼等（政府、政権党）尊王と異なる。尊皇主義を誤り、専制政体、有司専制であり、立憲政体を妨害するものであり、政府はロシア皇帝の様な苦難を天皇に負わせる者であり、自由党は英皇帝の様な尊榮を保たせる政策である、と述べた。

自由党が尊王論キャンペーンを張った理由は、自由党尊王論への攻撃が帝政等からだけではなく『時事新報』『東京日々新聞』などのマスコミが批判文を掲載した事にもその一因がある。佐々木高行は日記の中で板垣らの憲法草案を以下のように評した。佐々木は、明治16年9月1日板垣帰県の懇親会において、日本の憲法草案が、ドイツの憲法に近いものであるなら政府の圧政により人民の利益を害する、と述べた。実際はドイツの憲法もこの時期に改正され欽定憲法ではなくなっていたが、伊藤を筆頭とする藩閥政府の憲法プロジェクトチームは専ら改正される前のプロイセン憲法をモデルにした。

土佐は民権派の発祥の地であり、進歩と改革を主導したという評価もある。しかし、民権派の実像は野心に満ちたものがあつた。彼らが主張する薩長藩閥批判の背景には、土佐派の政権中枢への参画要求、日本の国権拡張、アジアへ

⁵ 板垣退助『自由党史題言』岩波書店1957年28頁

の帝国主義的進出が征韓論争当初から底流として彼等の思想的背景にあった。

明治政府は、五箇条の御誓文の精神にのっとり、制限君主制、公選の議會を作ることを明治13年の政変以降明確にした。民権派の対立点はいずれの勢力により多くの権力を与えるかの対立であった。明治憲法第一条には「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」これは条文全体を支える基本思想である。日本には「万世一系」受け継がれてきた皇国の統治形態があり、これは神々の定めた日本古来の「法」であり、この「神々の法」と西洋から導入する憲法とをいかに矛盾なく合体させるかが大きな課題として彼らに提起された。

以下は大日本帝国憲法冒頭の天皇の項である

第一条 大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス 第三条 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

憲法制定をめくり民権派と政府は対立したということは、日本の多くの研究者、それも自由民権運動の研究者はことさら指摘してきたが、憲法の最も重要な中心部分、皇国観に基づく日本の国体の堅持という点については民権派と政府との相違はなかった。自由民権指導者の皇国観は政府主流派と同一である。

自由民権運動のイデオロギーは以下の前提がある。彼等の民主主義や自由の概念の前提は、第1に、皇国思想を国家規範の基礎としており、国民は対天皇への無条件の忠誠と服従を前提にしていたこと。第2に、彼等の自由や民権は身分・財産・男女などを問わない国民一般の平等な自由ではなかったこと。第3に、政治思想において政府以上に「野蛮国」後進国への侵略性を有していたこと。

民権派の憲法草案もまた皇国思想を基礎にした憲法体制であった。日本人の神話が国家理念に確固とした位置を占めたと同様に、日本で最初の政党の立党理念も皇国思想によって貫かれていた。にもかかわらず政府、政府党(帝政党)から反皇国であるとして批判された明治15年以降彼等の主張は自己矛盾に陥いった。

今日日本の論壇では、中江兆民などの民権派があたかも平和主義者であり、今日流に言えば非武装中立的な小国主義者であったかのような主張がある。⁶

⁶ 田中彰『近代日本の歩んだ道——「大國主義」から「小國主義」へ』2005年6月人文書館、松永昌三『中江兆民評伝』1993年5月岩波書店。

その根拠は、中江兆民が明治15年8月12日『自由新聞』に書いた論説「論外交」において、軍備増強は道徳、経済上からみても望ましいことではないとただ一度だけ書いた事を論拠とする。兆民が平和外交論を述べたことはこれだけであり、同じ兆民が朝鮮半島への軍事行動を推進する主張を繰り返し述べ、実践していることはよく知られている。兆民を含む民権派の政府批判の中心は愛国主義的対外強行論を主張し、政府の平和路線を批判した。民権派は成立当初から民権と同時に軍拡による大陸への侵攻、国権論を主張していた。民権派成立のきっかけとなった征韓論がそれである。また民権派の最後の行動となった明治20年三大事件建白運動の後藤象二郎の檄文は兆民の手によるものであるが、その三つの建白の一つ「外交失策の挽回」とは政府の大陸弱腰外交、平和外交を批判するものである。

自由党の主張や民権派の多くの人物による政府との言論戦を丁寧に読めば、すぐわかることであるが、民権派の主張は成立時から結末まで終始一貫して政府の対大陸弱腰外交を批判していた。つまり、民権派が成立したきっかけとなった征韓論以降、江華島事件、壬午軍乱、甲申事変、大阪事件、三大事件建白運動に至る一連の政変時における彼等の主張は一貫して大陸強硬論であった。

明治初期の日本の国力と国際環境は軍事大国を目指すほどの国家ではなく、東アジアでは清国の下、朝鮮と同等の位置にあった。現実の国際的地位が小国そのものであり、弱腰外交を批判したのが民権派であった。彼らのスローガンは終始民権と同時に国権が大きな柱であり、民権は内政むけ、国権は外交むけの政策スローガンであった。

中江兆民は西南戦争後、玄洋社の社員をはじめとする若手民権派左派とともに活発な大陸工作を行った。壬午軍乱後においての中江兆民は、宗像政らと中国への政治的軍事的進出の足がかりとして東洋学館建設を計画した。しかし、その活動は成功せず、頭山、平岡らの玄洋社首脳部によって中江らの活動は引き継がれた。彼等の脳裏には西郷の志を継ごうという意識があったと『玄洋社史』には記されている。後藤象二郎に近い関係にあった兆民は、壬午軍乱に呼応して玄洋社グループとともに大陸へ足がかりを築くために清国に赴いた。政府は朝鮮半島の派閥争いを利用して朝鮮半島に深く関与しようとする姿勢がこ

の時期にはなかったが、民権派は以後これを外交失策として批判した。

自由民権運動が終結した明治20年、中江兆民は『三酔人経綸問答』を書いた。兆民が描いた三人の人物、豪傑君、紳士君、南海先生は兆民の分身か、当時の世相か、はたまた、南海先生自身が兆民とも言われる議論がある。豪傑君は西洋と同様の海外侵略を説き、紳士君はリベラリズムを説き、南海先生は茫洋として結論を示していない。しかし兆民の実践はこのときまで、そしてこれ以降も明確に豪傑君の立場をとっている。同書に兆民が示した3人の人物像は明治10年代の若かりし時期に、兆民が接した玄洋社の三人の代表平岡浩、箱田六輔、頭山満をモデルとしていると考えるのが妥当である。同書は明治10年代の政治活動からの決別宣言とも読める。

兆民がモデルにした玄洋社のルーツは土佐派とも交流があった九州の不平士族の一派である。明治11年に西南戦争など士族反乱に参加した九州の不平士族のグループは開墾社、向陽社を結成し、征韓論や反政府的活動を行なった。翌年にこれらを統合して玄洋社と改名した。玄洋社は、皇室敬戴、本国愛重、人民権利のスローガンとともに九州の自由民権運動の代表的結社になった。彼らは初代社長に平岡浩太郎を選び福岡に本部を置いた。平岡時代の玄洋社は民権派と言われたが、二代目箱田六輔、三代目頭山満の代になって、反民権、国権主義を鮮明にしてアジア拡張主義を唱えた。後に日清・日露戦争以降、彼らは日本の影の社会で暗躍し国家主義団体、テロの黒幕として知られた。特に頭山満は昭和初期まで極右のリーダーとして活躍した。土佐派は玄洋社とともに金玉均による甲申事変、大井憲太郎らの大坂事件の拳兵に深く関わっていたことが知られている。民権派は征韓論以降も大陸に対して一貫してタカ派として暗躍した。

彼らの大陸工作の意図はアジアの近代化という美名を建前としていた。朝鮮半島の開明派を支援する事を名目として保守派の朝鮮王朝を転覆させ、朝鮮半島の文明開化がなければ、西洋列強による支配が大陸を通じて日本に及ぶという論理が表向きの外征の理由であり、脱亜入欧の思想を実践した。この論理は民権派消滅の後、政府の大陸侵攻の論理として継承された。

明治10年代において藩閥政府の側は大陸への関与には慎重政策をとった。そ

れは松方デフレ以降の日本の財政問題にその要因があった。西南戦争後逼迫する日本の財政力では外征するほどの軍事的余力はないことを政府は深く認識しており、外征には約10年の時間が必要であった。⁷ これ以降、新興企業の勃興と増税による財政健全化によって、清国に負けない軍備増強をはかることを待って、藩閥政府は初めて朝鮮政府の一派に深く関与し、本格的な大陸侵攻政策を展開した。

植木枝盛もまた中江兆民同様に小国論者という誤った評価が今日なされている。しかし植木枝盛は明治10年代の朝鮮半島における日本の権益を、専ら日本の主権の侵害という観点から論じている。日本の主権侵害は直接的には経済的利害ではなく、公使館への侵害を意味し、これは国権の侵害として日本のナショナリズムを喚起するに十分な理由である。政府は明治20年代になると国権を盾に反政府派を攻撃するようになると政府の戦略に対して民権派は守勢に回る。政府の意図はナショナリズムの高揚と同時に民権派の民権論を牽制するねらいがあり、そしてそれは成功した。

土佐の自由党主流派はイギリス型の憲法を目指した。彼達は彼等の皇国意識が低いのではなく、政府に対して政党の権限を拡大できる余地が大きいことがその要因であった。自由党、改進黨とも政党の権限がより大きいイギリス型を指向したことは当然であった。これに対してイギリス型憲法が権力分散型であり日本の風土にはなじまないと薩長藩閥政府主流派が考えたことは当然であった。イギリス型憲法の歴史は君主の権限を政党が制限した歴史を持っていたからである。日本の古代からの国家形態の近代的進化になじむキーワードは「統治権の総攬」である。これは天皇が国政全般を掌握しつつも宗教的權威を持った絶対君主であり、かつ直接政治の責任は天皇が取らない巧妙な政治形態を彼等は目指した。政府が目指した日本にふさわしい国家形態は日本の伝統を継承したものである。天皇が政によって、天皇の徳を及ぼし、家臣はこれを受けて善政を行うという国家形態が日本の本来の国体であった。

藩閥政府主流派は自由党の主張では政党が国体を蹂躪する要因となると批判

⁷ 『井上毅文書』には政権の最も重要なブレン井上の言葉によって政府の立場が明解に述べられている。

した。これは政党に対する批判としては極めて有効な戦略であった。逆に政党側にとっては国民を敵に回しかねない攻撃であって、政党は以後弁解する側にまわった。イデオロギー闘争において政府側は優位にたち、政党側は明治15年以後一貫して受け身となり、激化事件に走る一派によって民権派は孤立し、ついには解体した。彼等の帰結としては当然であり、その後の彼等の末路が帝国議会政治家や極右翼、大陸浪人であったとしても何らの自己批判がなかったのは当然であった。

小 括

幕末維新を推進した社会思想は尊王攘夷運動である。維新後の尊王攘夷運動は愛国主義に転化した。社会共同体としての国への愛着は愛郷心の延長である自然な感情でもある。しかし、政府の期待する愛国心は政府に対する忠誠心を伴ったイデオロギー戦略であった。これに対して反政府側の訴える愛国心はもともと国家体制に関わらない愛国心のはずであったが、彼等もまた愛国主義を政争に利用し、政権党との差異は消滅した。民権派はその曖昧さを攻撃され彼達は自滅し解体した。

明治維新を推進した尊王攘夷運動は、明治以降の愛国主義イデオロギーに全面的に収斂され、他のイデオロギーは入り込む余地はなかった。明治維新後における文明開化、西洋啓蒙思想の導入、自由主義の導入はナショナリズムと結合して、アジアへの排外主義へと昇華した。日本の社会思想形成の上で国家の権力以上に在野の知識人やマスコミは大きな役割を果たした。自由民権の論客を多数輩出した土佐派は近代日本の思想史でも特筆すべき位置にあった。征韓論から三大事件建白運動、帝国議会開設以降における在野にまわった彼等の活動は日本のナショナリズムが排外主義に転化する上で大きな役割を果たした。